

琉球大学学術リポジトリ

[特集]タイ国をたずねて

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 由次, 屋我, 嗣良 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016514

特 集

タイ国をたずねて

川島由次, 屋我嗣良*

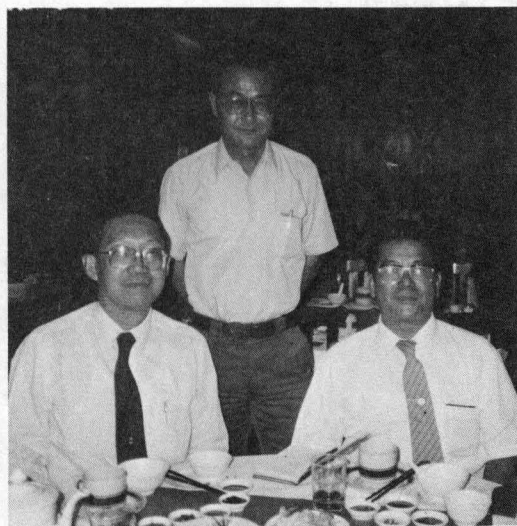
(琉球大学農学部)

はしがき

このたび、チュラロンコン大学との共同研究「有用生理活性成分を生産する木本性植物の探索と活用に関する研究」のため、タイ国を訪れる機会を得た。

この共同研究は、タイ国と沖縄とが気候および植物相がきわめて似て、両国の未利用資源の活用と開発を目的として、相互にそれらを研究開発していこうという主旨で行われるものである。

そのため昭和60年3月には、チュラロンコン大学から2人の研究者が来沖、琉大より2人の研究者がタイ国にいき、それぞれの専門分野ごとの共同研究が実施された。



筆者らが訪れたタイ国は、3月は日中30℃上の大変な暑さで乾期で雨が降らず、バンコク郊外ではまったく枯れた原野を見ることがしばしばであったが、バンコクの中心にそそぐメナム河の周辺は豊かな自然が生きていた。

バンコクの街路樹は、マメ科植物が主に植栽されていた。熱帯地域では有機物の分解が早くマメ科植物のように根粒バクテリアと共生して、窒素分を保有している植物は熱帯の地域に適応している植物といえよう。マメ科の1つであるギンネムも庭やその他のところで見られ、Kathinと呼ばれていて、その若葉、花、若い種子は食用に供している。

また、マングローブの種類は多く70種以上生育しているといわれている。チャンタブリーに行く途中、海岸に沿っていたるところに生育し、建築材や良質のチャコールが出来るようで、タイ国の家庭用・工業用燃料として重要な位置を占めている。しかし、近年マングローブなども乱開発がすすみ、これらが減少してきたので、それを造成していくための生態的研究が活発になってきている。またタイ国は、豊富な果実類と豊かな人情の国でもある。

次にいままで筆者らが収集した文献、見聞などにより、タイ国を出来るだけくわしく紹介しようと努めた。タイ国を御理解いただけるために僅かなりとも役立てば筆者らの幸いとするとところである。

この報告をまとめるにあたり御協力いただいた沖縄総合事務局、地域産業振興会、琉大医学部ウ

イルス教室の石嶺毅氏, 事務局企画調査室渡久山彰氏に, それぞれ厚くお礼を申し上げたい。

1. タイの地理

タイ国 (Thai land) はインドシナ半島西部の王国で, 面積は51万3千km² (日本の1.4倍), 南北が北緯5度30分から20度30分までの約1,600

km, 東西が東経97度30分から105度30分までの約800kmにおよぶ。そして, 南はタイ湾とマレーシア, 北と西はビルマ, 北東はラオス, 東はカンボジアに接している。国土は政治・経済的に大まかに「中部タイ」・「東北タイ」・「北タイ」・「南タイ」の4つに分類されている (図1) (タイ統計局の分類による)。

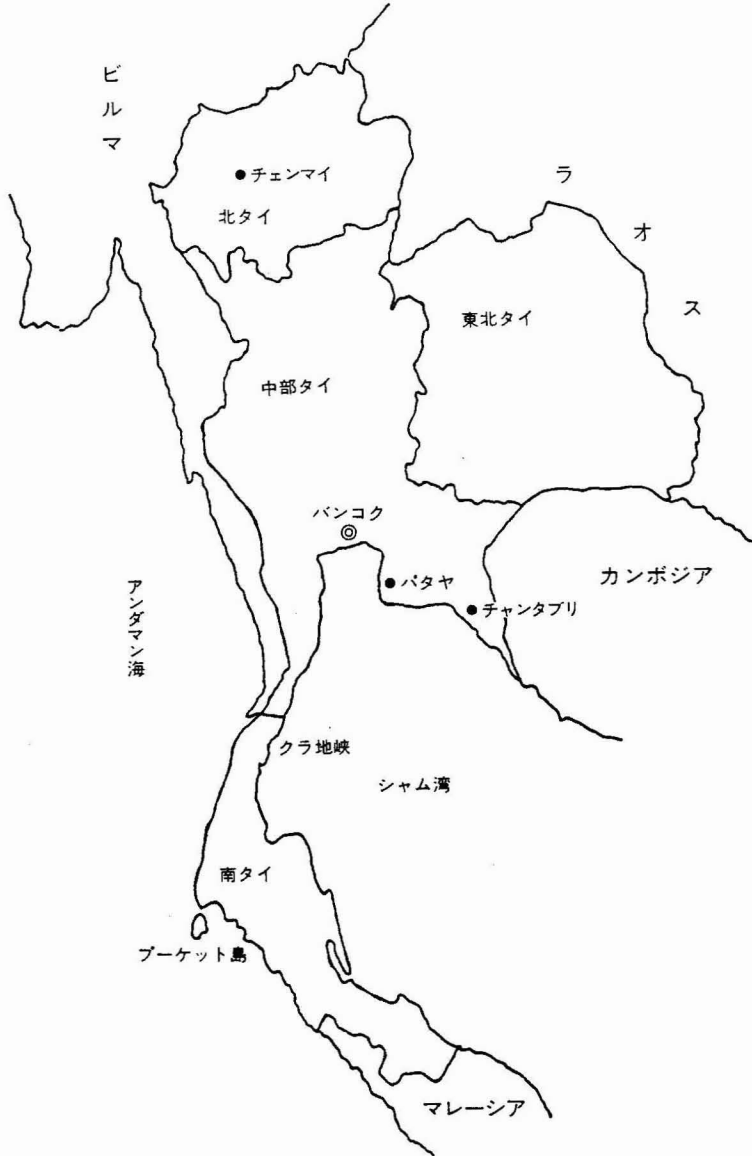


図1. タイ地域区分と国境を接する国々

1) 中部タイ

メナム河（正式名はチャオ・プラヤー河）に沿う低平な沖積平野（デルタ）を中心とする地域である。平野部の土壌は肥沃でタイ穀倉地帯となっている。運河がよく開発されており、交通網も早くから発達していた。タイ経済を支えている輸出米のほとんどはこのデルタで生産されており、タイ国の心臓部ともいえる地域である。中部タイ北部は起伏に富んだ平野で、とうもろこし・野菜類・フルーツ類などの畑作物の栽培が行われている。カンボジアに接する地域は、中部デルタよりも南タイに近い土壌・気候であり、稲作とともにゴム栽培が行われている。シャム湾に沿った海岸線には景勝地が多く、パタヤは「タイのアカプルコ」といわれている。

2) 東北タイ

「コーラート高原」とよばれる海拔100～300 mの起伏の緩やかな赤色砂岩（ラテライト）の広大な高台地で、サバンナともいえる疎林地帯である。この地域は雨期に多量の雨は降るがその期間は短く、乾期が長いために慢性的な水不足地帯で農業は発展していない。しかし、畜産業は盛んでありウシ・スイギュウなどを中部タイへ供給している。近年、溜池灌漑を利用して野菜栽培が行われるようになった。東北タイは長期間にわたり支配者によって見捨てられてきたために開発が遅れ、タイでも最も貧困な地域となっており、東北部出身者（イサーン人）というと無知で未開な野蛮人という代名詞として使われ、中部タイの人々から蔑視されている。

3) 北タイ

北タイの北から南へいくつかの山脈が走り、それらの間に盆地が形成され、ケツ岩・砂岩・石灰岩などからなる古生層の森林性山地である。その盆地の中を西側からピン川・ワン川・ヨム川・ナン川の4河川が流れメナム河の源流となっている。この地域の山脈の海拔は平均1,500 mであるが、タイにおいては最高地であり、チェンマイ市は避暑地となっている。タイの最高峰はチェンマイの東南にあるインタノン山（2,595 m）であ

る。北タイでは5月～10月の雨期には多量の雨が降り、盆地での稲作を助けるとともに南下してメナム河の氾濫を招き、中部デルタを一大稲作地としている。この地域はタイで最も古くから稲作が行われたところでもあり、灌漑施設も発達し土地生産性は中部タイよりはるかに高いとされている。近年、稲作の他にタバコ・綿花・フルーツ類の栽培が行われるようになった。山岳地帯はチーク材の産地として有名である。

4) 南タイ

マライ半島の北半部の低い山脈が緩やかな起伏をつくる狭長な地域で、その間に狭い低地・多くの小さな河川が流れている。この半島の最も狭い部分を「クラ地峡」といい、わずか25 kmの幅しかない。半島の東側はシャム湾に、西側はアンダマン海に接している。アンダマン海の海岸には多くの離島が散在し、そのうちで最も大きいのがスズ鉱山で有名なプーケット島である。半島東側の海岸平野は、5～35 kmの幅をもち稲作が行われている。半島北部の土壌は砂地で農耕に不適であるが、南部は砂と粘土質ロームでゴム栽培に適しており、ラタン（籐）・ヤシが繁茂する熱帯降雨林地帯である。海岸のマングローブ林の地下にスズ鉱脈が走っており、スズ鉱石の採掘とマングローブ林の破壊が問題となっている。

2. 気候

タイ全域がほぼ熱帯モンスーン気候に属し、季節的には乾期（dry season, 11～4月）と雨期（rainy season, 5～10月）に分ける場合と、冬期（winter season, 11～2月）、暑期（hot season, 3～4月）そして雨期（5～10月）に分類する場合がある。乾期には北東風が吹き11～2月はマライ半島東岸を除いてはしのぎやすいが、3～4月はこの季節風が弱まり暑さは猛烈をきわめるようになる。雨期にはアンダマン海から南西風が吹き大量の降雨をみる。バンコクと那覇市との月間平均気温・湿度・降雨量の比較を図2～4に示した。気温に関していえることは、6～9月までの夏期に相当する気温はバンコクと那覇では

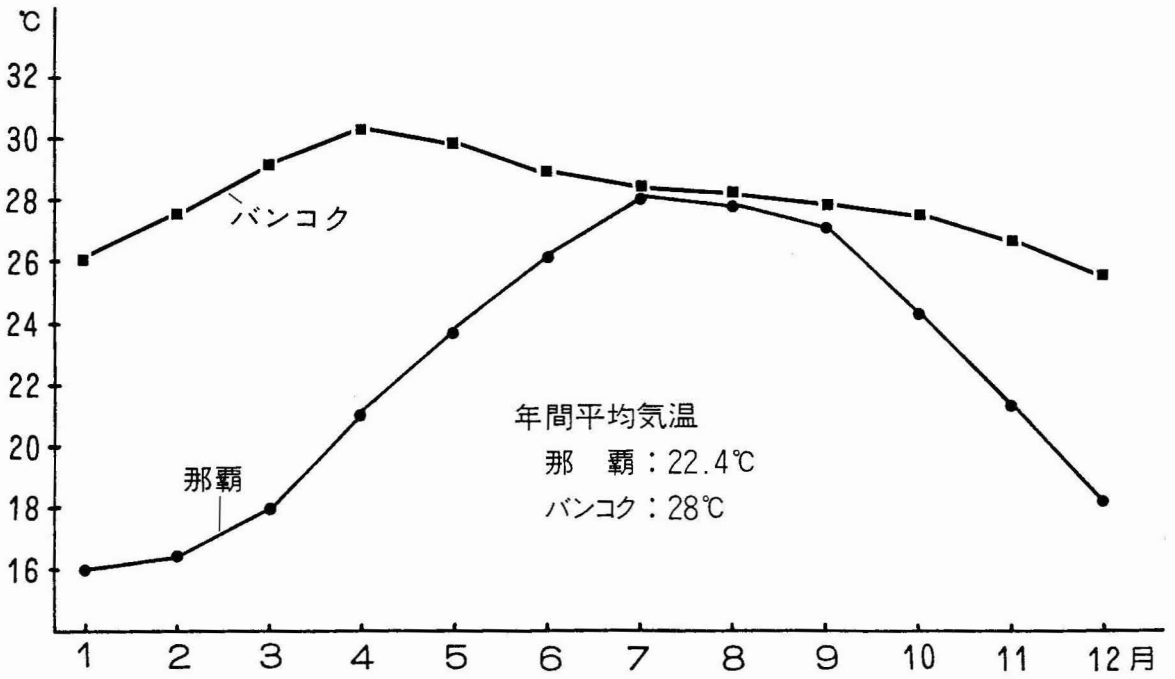


図2. バンコクと那覇の月間平均気温(理科年表・1984年)

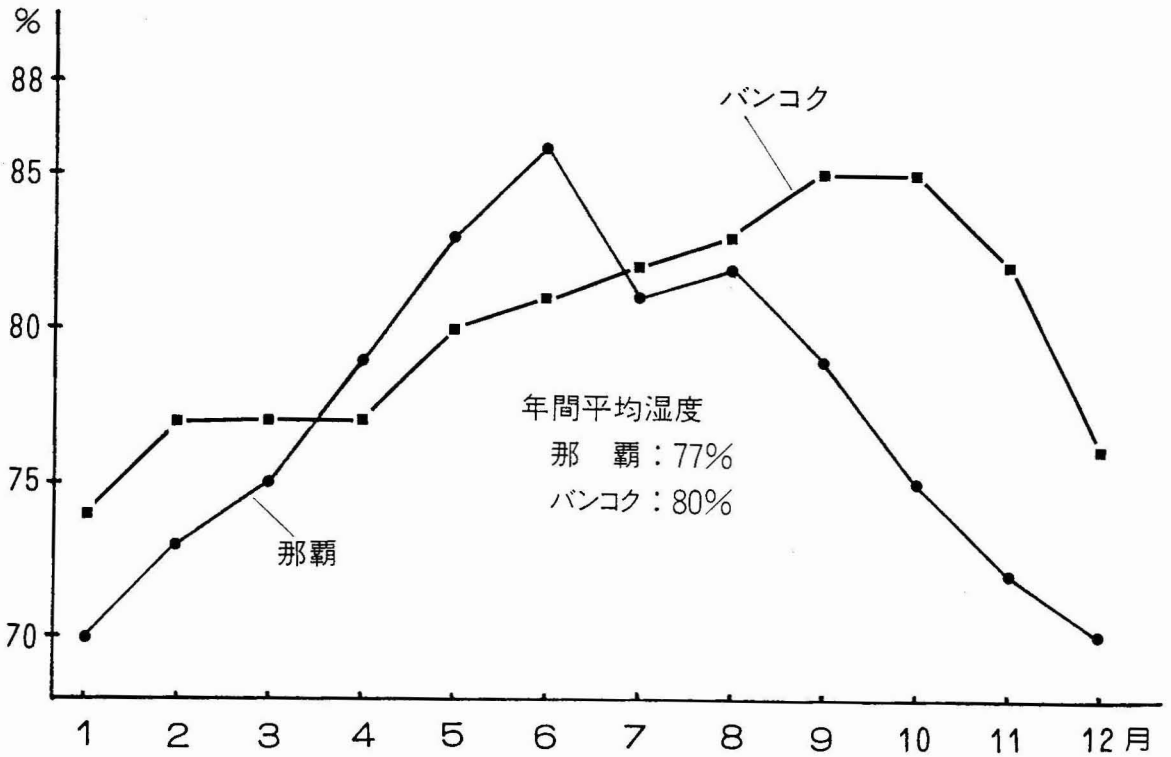


図3. バンコクと那覇の月間平均湿度(理科年表・1984年)

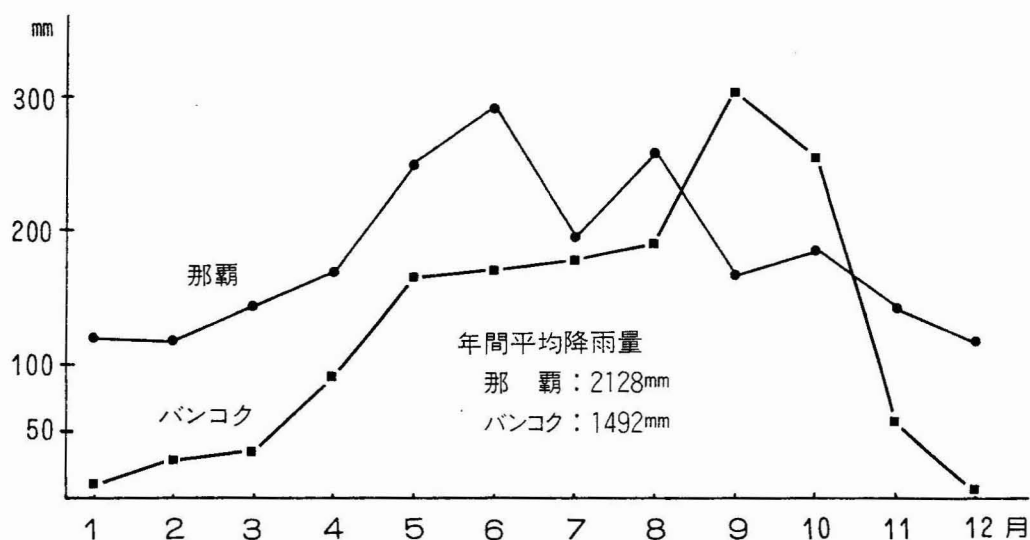


図4. バンコクと那覇の月間平均降雨量

大きな差がないということである。つまり、熱帯にあるバンコクは亜熱帯・温帯地域の冬期に相当する期間の温度がきわめて高い都市だということであり、乾期の後半（3～4月）が最も暑くなり、日中の最高気温は35～38℃に達する。湿度はバンコクの乾期といえども決して低湿度を示す訳でないことは図より明らかであり、那覇の方がバンコクよりも高い月は4～6月まで3カ月間にすぎない。バンコクの降雨量は那覇よりも低い。乾期（11～4月）の平均月間降雨量は那覇のどの月よりも低い。

私達の滞在した3月下旬の10日間、1回も雨に降られなかったことも事実である。蚊などの衛生害虫は雨期の初期に活動が活発となり、乾期にはかなりおとなしくなる傾向がある。

3. 人種・宗教

タイの人口は5,400～5,500万人（1985年）と推定され、人種的にはタイ族が85%以上をしめ、華僑が約600万人（台湾系が約350万人）、マレーシア人が約100万人（南タイに多い）いる。また、北部山岳地帯には少数民族（メオ族・カレン

族、ラーオ族・ミャオ族・アカ族・ヤオ族・シャン族・リス族・ラフ族・ワ族・クメール族・モン族）が約50万人いる。これらの民族の中には、日本人と容貌が酷似しており、食生活から風習までかなりの共通点を有する部族もあり、日本人のルーツを探る点で多くの民族学者・人類学者が調査・研究の対象としている。タイで都市といえるのは首都のバンコクのみであり、人口は今日500万人を越えたことは明らかで隣接するトンブリ地区を含めると約550万人とされている。バンコクは政治・経済・教育・文化の中心であり、その影響力は莫大である。つぎに人口の多いのはチェンマイ市（約20万人）で、京都のように古都のおもかげのあるしっとりとした街といわれている。ミス・タイは圧倒的にこの街出身の女性が多いことで有名であり、またこの市の北にある「黄金の三角地帯」で生産される麻葉の第一次集産地でもある。3番目は中部タイにあるナコン・ラーチャーシーマー市で人口は約8万人、4番目がウドン・ターニー市（人口約7万人）、人口が5万人レベルの市にはハジャイとナコン・サワンがある程度である。

公用語はタイ語であるが、東北タイの国境沿いでは「ラオ語」・「ベトナム語」・「カンボジャ

語」が、また半島部では「マライ語」が、華僑の間では「中国語」が使用されている。大学教官・高級官僚・インテリ層は欧米へ留学経験があり、英語は上手である。ホテル従業員・観光業者も英語はかなり上手であるが、最近彼らの間に「日本語学習熱」が盛んなようである。

宗教は「小乗仏教」で人口の95%が仏教徒である。その他、イスラム教徒が4%、キリスト教徒が0.6%で、山岳少数民族は精霊崇拜を信仰している。小乗仏教が日本の大乗仏教と異なる点は「俗と僧」との断絶のよきびしい点であり、男子は仏門に入ると「227カ条の戒律」に従う身となり、たく鉢と勉強にいそしむ日々をおくる。タイでは男子は一生に一度は仏門に入る習慣（1週間から2年間）があり、僧侶生活の経験がないと1人前の男性とは認められない。小乗仏教では女性は成仏できないとされており、宗教においてのみ男性優位の社会を構成する。全国には寺院が約27,000箇所、僧侶は常時30万人といわれ、バンコク市内でも2~3人連れだった黄衣の僧侶姿はいやでも目に入る。

時差は日本より2時間遅い。大学・官庁は完全週休二日制で、勤務時間は8:30~16:30までである。通貨単位はバーツ (Baht) であるが、我々の滞在した当時（1985年3月）は1バーツ=約10円であったが、最近の円高で1バーツ=約8円（1986年1月）である。硬貨は1.5バーツの2種が、紙幣では10・20・100・500バーツの4種がある。車は日本と同様に「左側通行」であるが、信号機は自動車専用しかない。すなわち、タイという国は「車優先社会」なのである。だから道路の横断はまさに命がけの苦行となる。どうやらタイ国のみならず東南アジア諸国では「歩行者優先」などという原則はまったく存在せず、車にひかれた人は運が悪いのだと考える社会らしいので、日本人は交通事故に巻きこまれぬ細心の注意が必要であろう。調査の時に車を使用する際にも、現地の人に運転してもらおうのが無難である。

4. 農水産物と鉱物資源

タイの穀類で最も重要な作物は、平野部・低地

部で生産される「米」であるが、高原地帯の一部でも雨期に生産されるし、山岳地帯でも陸稲が栽培されている。おもな高原地帯の食用作物としては、トウモロコシ（メイズ）・緑豆 (mungbeans) ・キャッサバ・サトウキビ・ソルガム（コウリヤンまたはマイロ）・にんにく・タマネギ・トウガラシなどがある。

フルーツの種類は豊富でタイは近隣諸国へかなり輸出している。一年中市場に出まわるものには、オレンジ（マンダリン）・パパイヤ・ポメロ（グレープフルーツに似た風味）・パイナップル・バナナなどがあり、2~3カ月間の季節性の強いものに、ドリアン・マンゴスチン・リュウガン・ランブータン・レイシ・パラミツ・マンゴー・ローズアップル・カスタードアップル・ジャックフルーツ・スイカ類がある。6~8月のドリアンの収穫時期になると、バンコクで1個500~600円くらいで買えるようであるが、季節はずれの際には1個3,000円程度にまでなり、タイでも高級なフルーツのようである。

木材としておもなものは、チーク材と竹があり、加工品としてはマングローブ材よりつくられた木炭がある。タイでは燃料として木炭に全面的にたよっており、一家庭の年間消費量は平均350kgという。

花卉としては、ラン・シンビジウムがおもで、その他は cut flowers（切り花類）として輸出されている。

畜産関係では、おもな家畜の飼育頭類はつぎのとおりである。ウシ（肉用牛と乳用牛）：460万頭、水牛：615万頭、ウマ・ロバ・ラバ：3万頭、ブタ：380万頭、ゾウ：3千頭、ニワトリ：6,500万羽、アヒル：4,500万羽（FAO 出産年鑑 1983）。水牛は水田地帯の役用として活躍してきたが、近年トラクターの普及によって次第に減少の傾向にありタイ政府は増産対策を検討している。ゾウはチーク材の生産に“生きているブルドーザー”として大きな貢献をしている。

魚獲高は225万トン（1983）でおもなものはカツオ・サメ・エビ・カニ・カキで、海産物が90%をしめている。エビ（クルマエビ=ブラウン）とカキの養殖は日本の援助で成功しており、

エビは日本へも輸出されている。

鉱産物では、スズ (Sn)・タンゲステン・マンガ
ン・アンチモン・石灰石・褐炭・苛性カリ・鉛
・塩・宝石類 (サファイア・ルビー・ジルコン)
などがある。最近シャム湾の海底油田の開発に大
きな期待がかかっている。

5. タイの王朝史

日本人はタイ国の王朝の歴史についてはほとん
ど知識がないといってよい。しかし、タイ王朝の
歴史を知っておくことは、タイ国への理解を進め
交流を深める点で有益と思われるので簡単にふれ
てみる。

タイ族の最初の国は南詔 (ナン・チャオ) 王国
であった。この国は現在の中国の雲南省北部から
北西部を領域として、7世紀中葉から1200年頃
まで存在した。このタイ族はたえず中国の圧迫を
受けていて、西方と南方へ移動した。南方へ移動
したのはタイ・ノーイ (小タイ) と呼ばれ、現在
タイ国を形成しているタイ族はこの一部である。
12世紀の初頭頃には、メナム河上流の谷間にい
くつかのタイ族の部族国家が建設されていた。チ
ェン・セーン国、パヤオ王国などがそれである。
これらは13～14世紀になってチェンマイ王国に
併合されている。タイ族が現在のタイの地に移住
してくる以前、この地はアンコールに都を置くク
メール王国の一部であった。

1) スコータイ王朝 (1238～1488年)

タイ族出身のクメール王国の総督がクメール王
国から独立して、1238年に建設したのがスコー
タイ王国である。タイの王朝史はこの時点から始
まり、250年間にわたり10人の王が君臨してい
る。なかでも第3代王ラーム・カムヘーン王
(1279～1300年) は名君の誉が高い。彼はス
コータイ王国の領土を現在のタイとほぼ同じくら
いに拡大した。中国と友好関係を維持し、陶工を
招いて窯業を起した (宋胡録・寸古録)。彼の最
大の功績はタイ文字を発明したことである。

2) アユタヤ王朝 (1350～1767年)

1300年以降衰退の一途をたどったスコータイ
王国の後で、スコータイより南へ約300km下った
アユタヤの地に、ラーマ・ティボデー1世王
(1350～1369年) によって新王都が建設された。
以後アユタヤ王朝は417年間・35代の国王によ
って受け継がれた。第8代国王のボロム・マラー
チャ2世 (1424～1448年) はクメール王国の王
都アンコールを攻略し、クメール王国の高級官吏
・バラモン教の僧侶・技師など数千名を捕虜とし
てアユタヤへ連れかえった。9代目ボロム・トラ
イロカナート王 (1448～1488年) はクメールの
捕虜からクメール王国の諸制度を学び、統一国家
成立のための諸制度を確立した。「サクディ・ナ
ー制度」 (位田制)、副王制度、王子・側室の五
階級制度、王室に関する諸制度などである。タイ
国へバラモン教が入りこんだのはこの時代であり、
宮廷の儀式や音楽・舞踊や民衆生活に今日におい
ても少なからぬ影響を与えている。16世紀中葉
以降は統一国家としての機能は弱まり戦国時代の
様相を呈し、とくにビルマとの戦争は約200年間
にわたってくりかえされた。その間、王都アユタ
ヤは2度にわたって陥落している。1度目は19
代王マハー・タムマラーチャの時代で、1569年
より15年間ビルマ王の支配下に置かれた。タイ
国の歴史で外国に征服されたのは、この期間だけ
である。ビルマ支配から脱却し国を再建したのは
20代目のナレスエン王 (1590～1605年) であり、
彼は9代目のボロム・トライロカナート王と
ともに、この王朝の偉大な王様として崇められて
いる。1767年エヤタット王の時代の2度目の陥
落で、王都アユタヤは徹底的に焼き払われ、この
時代のほとんどの公文書・記録が灰燼と化し、今
日においても歴史研究の大きな障害となっている
という。日本でも有名な山田長政 (?～1630年)
は23代目ソントム王 (1620～1628年) の信頼
を得て、ナコン・シタマラートの総督となった。
ソントム王の死後、王位継承をめぐる争いにおい
て、長政は王子派に参画し王弟派と対立した。し
かし、形勢は彼にとって不利な展開となり、戦
斗で負傷した長政は療養中に王弟派の密使によ
って傷口に毒薬を塗られ殺された。さらに、日本人町

は武装集団を有していたので、王弟軍によって攻撃され、アユタヤより消え去ったのである。タイの歴史において、山田長政は内政に干渉した好ましからぬ外国人とうつつているようである。

3) トンブリ王朝 (1767～1782年)

1767年、アユタヤを占領しているビルマ軍を打ち破り、トンブリ(メナム河をはさんだバンコクの対岸地区)に王国を再建したのがタクシン王(1767～1782年)である。彼の父は華僑(潮州系)で、母はタイ人であった。晩年にいたり、彼は精神的に異常をきたして処刑されており、この王朝は彼1代わずか15年で終わった。

4) チャクリ王朝 (1782～現代)

トンブリ王朝時代の軍司令官であったチャクリ将軍が、1782年にタクシン王の王位を廃し自ら王となる。彼が王都をバンコクへ移したので、「バンコク王朝」とも呼ばれている。

この王朝の国王は「ラーマ」の名前で呼ばれている。ユル・プリンナーの演じた有名なミュージカル『王様と私』は、アンナ・レオノウェンス著「タイ宮廷の女性家庭教師」(1870年)とマーガレット・ランドン著「アンナとシャム王」の2作品をベースにして脚色されたものである。プリンナーの扮した王様は、ラーマ4世モンクット(1851～1868年)がモデルであり、この作品によって彼の名とシャム宮廷の生活が世界に知れ渡った。当時シンガポールにいた英国人の未亡人アンナは、王子チュラロンコンの英語家庭教師として雇われたが、英語よりも思想的に王子に大きな影響を与えたとされている。モンクット王は即位してから、アヘン戦争やイギリスのビルマ植民地化を通じて、列強諸国の脅威をひしひしと感じていた。1855年、イギリスはモンクットの旧知であったボーリング卿を派遣して“ボーリング条約”を締結し、シャムの門戸を初めて開くことに成功した。イギリスの目的はシャムの米を中国へ輸出し、シャムへ自国の綿布をもたらすことであった。この条約をきっかけとして、シャムはアメリカ・フランスなどと修好条約を結び、王室独占貿易に終止符をうち、国際貿易体制へ強制的に組み込ま

れていったのである。これらの条約の締結は、シャム支配層の財政基盤をゆるがし、社会体制に根底的な改変を迫るものであった。

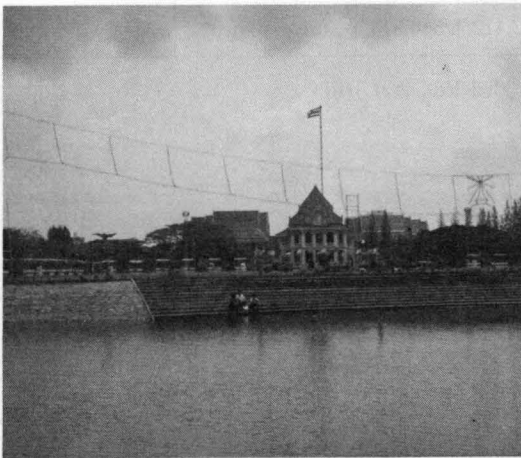
条約締結以降、米の輸出解禁により、外国市場での米需要に応えるためシャム米の増産が強く求められた。その結果、荒れ地であったデルタ下流地に運河の開削と開田が進行し、デルタの景観が一変してしまった。ボーリング条約はメナムデルタを世界の穀倉とする機会を作ったのである。

シャムの近代化に大きな貢献をしたのが、ラーマ5世・チュラロンコン王(1868～1910年)であった。彼の着手した諸改革は、中央集権制・近代官僚機構・近代法典・義務教育・地税と人頭税の確立、立法院・近代的軍隊の創設、鉄道・郵便・電信・道路制度の導入、治外法権の徹廃、ドレイ制度・アヘン・トバクの禁止などがある。ボーリング条約は、独占貿易を基盤とするシャム王室権力を解体させるはずであった。しかし、シャムは伝統的な政治構造を維持しつつ、国際資本主義の世界に対応していったのである。シャムの独立を可能としたのは、なによりもラーマ4世と5世チュラロンコン王の啓蒙的な内治政策と柔軟で賢明な外交政策が、どん欲なイギリス・フランス資本主義につけてむ口実を与えなかったことによる。また、英仏間にシャムを「緩衝地帯」とする合意のあったことや、列強諸国がシャムに軍事干渉を加える余裕のなかったことも幸いした。「チュラロンコン大学」は、ラーマ5世死去の6年後、1917年3月24日に創立された。ラーマ6世ワチラウッド王(1910～1925年)の時代になると、シャムは深刻な財政危機におち入り、ラーマ7世プラチャティボック(1925～1935年)治世の1932年に「人民党」のクーデターが成功して、シャムの絶対王制は終りを告げた。この年よりシャムは形式的には民主国家として再出発することになる。ラーマ8世アナンド王(1935～1946年)の1939年に首相ピブンは「外国人の蔑称」である“シャム”から「自由を意味する」“タイ”へと国名を変更した。1941年、太平洋戦争が勃発するとピブンは日本と攻守同盟(1942年1月25日)を結んで戦争遂行に協力を約し、英米諸国に対して宣戦を布告した。日本軍が敗北

するや1945年8月16日の国会で、「宣戦布告無効宣言」を採択するという「功妙な」外交政策によって敗戦国という立場を回避することができた。この「功妙な政策」はベトナム戦争の終了時にも発揮された。現在、王はラーマ9世プミボン王(1946～)である。プミボン王室は国民の尊敬と支持が厚いので、タイにおいて皇室の批判・中傷は慎むべきであろう。近世において、東南アジアの大陸の中にあってもかく独立を保持し、列強の植民地にならなかったのはタイ国のみであり、それだけにプライドの高い国民であるといえよう。

6. チュラロンコン大学の概要とタイの大学

チュラロンコン大学はタイで最も古くそして最も有名であり、最初の国立大学としてラーマ6世によってラーマ5世チュラロンコン王を記念して1917年に設立された。本大学はバンコク市内のほぼ中心に位置し、敷地面積は約500エーカー



で、構内には大きな寺院・近代的ビルディング・タイ式建築物が混在し、荘大な樹木が多数繁茂し、静かなたたずまいは歴史を感じさせる。学部学生数は12,332名、大学院生は3,771名、専任教官数は2,267名、非常勤講師は約350名である(1982年)。Ph.D.の所有者は24%、M.A.とM.S.が60%となっている(1981年)。組織としては14学部・126学科より構成され、学部名はつぎのとうりである。①文学部、②商学ならびに会計学部、③政治学部、④経済学部、⑤法学部、

⑥教育学部、⑦情報伝達学部、⑧理学部、⑨建築学部、⑩工学部、⑪医学部、⑫獣医学部、⑬歯学部、⑭薬学部。大学院は修士課程が76専攻、博士課程が3専攻(医学・獣医学・歯学)である。付属研究所には、人口問題研究所・社会研究所・健康研究所・環境問題研究所・語学研究所がある。付属施設としては、学術資源センター内に中央図書館・視聴覚センター・タイ国情報センターがあり、その他にシーチャン海洋研究ならびに訓練センター・コンピューターサービスセンター・機器センターがある。機器センターのビルと内部の機器類(電子顕微鏡・質量分析計・ガスクロマトグラフィーなどのほとんどは日本製)は1978年、日本政府の援助で完成したものである。タイの大学を一括して表1に示した(1982年現在)。

13大学のうち、国立大学は8校である。Open University(解放または放送大学)としては、ラームカムヘーン大とスコータイ・タマチャット大の2校があり、各々14万名の学生を収容しており、2校の学生数は全大学生の78%を占めている。チュラロンコン大はタイで最大の組織と規模をほこり、大学教官・研究者・高級官僚はこの大学の卒業生がほとんどをしめている。タマサート大学は社会学系の学科が充実しており、有力な政治家・ジャーナリストを多数輩出している。カセサート大学は農学系の学科が最も充実しており、林学部・水産学部はタイで唯一のもので、また国立養豚研究所ならびにトレーニングセンターと高地農業に関する研究施設を付属している。

タイで出世の早道は英語の話せることが条件となる国柄なので、学生に人気のある留学先は1位・米国、2位・英国、3位・ヨーロッパ諸国、4位がなく5位・日本という順らしい。官僚・軍人をめざす方が人生のメリットが高いので、優秀な学生は文科系に集中し、タイの開発・工業技術の向上という点で問題となっている。日本に留学を希望する学生はかなり奇特定の人物と思われるので、大切にしたいものである。

	創 立	教官数 (専任)	学 部 学生数	農学部 の有無	大学院 の有無	学部数	備 考
Asian Institute of Technology (アジア工科大学)	1959	70	600	-	?	?	
Chiang Mai University * (チェンマイ大学)	1964	1,259	9,573	+	+	11	
Chulalongkorn University * (チュラロンコン大学)	1917	2,267	12,332	-	+	14	
Kasetsart University * (カセサート大学)	1943	1,199	8,252	+	+	10	
Khon Kaen University * (コンケン大学)	1966	840	4,349	+	+	11	
King Mongkut's Institute of Technology (モンクット工科大学)	1971	648	7,070	+	-	10	
Mahidol University (マヒドール大学)	?	1,793	6,686	-	+	11	
Prince of Songkla University * (ソンクラ大学)	1964	853	4,085	-	+	9	
Ramkhamhaeng University * (ラムカムヘーン大学)	1971	744	141,925	-	-	7	Open Univ.
Silpakorn University * (シルパコン大学)	1943	400	2,855	-	+	7	
Sri Nakharinwirot University * (シーナカリンウイロート大学)	1954	1,352	11,503	-	+	4	
Sukhothai Thammathirat Open University (スコタイ・タマチラット解放大学)	1978	450	140,000	+	-	8	Open Univ.
Thammasat University * (タマサート大学)	1933	537	10,844	-	-	7	
総 計		12,412	360,074	+(5)	+(8)		

* : 国立大学 The World of Learning, 1982-83, 33rd Ed., より引用

参 考 文 献

1. Europa Publication Ltd. Ed., (1982). The World of Learning, 1982-83, 33rd ed., Europa Publication Ltd., London.
2. 石井米雄・桜井由躬雄編 (1985) : 東南アジア世界の形成, 講談社
3. 伊藤章治 (1984) : 現地報告・タイ最低辺ーほんの昨日の日本ー, 勁草書房
4. スーパーガイド・アジア編集部 (1984) : タイ, JICC 出版部
5. 園田 矢 (1980) : インドシナからの報告, 日本放送出版協会
6. 田中忠治 (1981) : 新タイ事情 (上・下), 日中出版社
7. 矢野 暢 (1983) : 東南アジア学への招待 (上・下), 日本放送出版協会